

第153回 埋蔵文化財セミナー

- N A R A Y A M A -  
奈良山 をめぐる  
宮都と土器生産



- M I K A N O H A R A -

報告① 「奈良山をめぐる宮都・集落・窯跡」

(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 課長補佐兼企画調整係長 筒井 崇史

報告② 「幻の都と幻の焼き物の里 - 恭仁宮と奈良山所在の窯跡群の最新研究動向 -」

京都府教育庁指導部文化財保護課 副主査 桐井 理揮

報告③ 「平城京の人々の暮らしを支えた奈良山丘陵」

奈良文化財研究所 都城発掘調査部 考古第二研究室長 神野 恵 氏

座談会 「奈良山をめぐる宮都と土器生産」

2023  
12.9 (土)

相楽会館 大ホール  
京都府木津川市木津上戸 15  
13:30-16:30 (開場 13:00)

第153回埋蔵文化財セミナー

**奈良山をめぐる宮都と土器生産**

日 程

13時30分 開会あいさつ

京都府教育庁指導部文化財保護課長 石崎善久

日程説明

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター  
調査課課長補佐 肥後弘幸

13時40分 報 告 1

「奈良山をめぐる宮都・集落・窯跡」

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター  
調査課課長補佐兼企画調整係長 筒井崇史

14時20分 報 告 2

「幻の都と幻の焼き物の里  
— 恭仁宮と奈良山所在の窯跡群の最新研究動向—」

京都府教育庁指導部文化財保護課  
副主査 桐井理揮

15時 休 憩

15時10分 報 告 3

「平城京の人々の暮らしを支えた奈良山丘陵」

奈良文化財研究所都城発掘調査部  
考古第二研究室長 神野 恵氏

15時50分 休憩

16時～16時30分 座談会「奈良山をめぐる宮都と土器生産」

筒井崇史、桐井理揮、神野 恵

16時30分 閉 会

主 催 京都府教育委員会  
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

会 場 相楽会館 大ホール

# ならやま 奈良山をめぐる宮都・集落・窯跡

(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
筒井崇史

## 1. はじめに

京都府と奈良県の境には低い丘陵が横たわっています。これを奈良山丘陵と呼んでいます。古代においては大和国と山背国(延暦13(794)年平安京遷都時に山城国に改称)の境でした(第1図)。

奈良時代には、この奈良山丘陵の南側、つまり大和国に当時の首都、平城京がありました。平城京は、和銅3(710)年に、奈良盆地南部の藤原京から遷都してきました。その後、延暦3(784)年に長岡京に遷都するまでのおよそ70年余りにわたって都でしたが、その間に一時期、平城京から離れて恭仁京、難波京と都が営まれたことがありました。

時に聖武天皇の御代、天平12(740)年から天平17(745)年にかけてのことです。

この時、最初に都を遷したのが、奈良山丘陵の北側に位置する恭仁京で、山背国に営まれた最初の宮都でした。

## 2. 宮都

奈良山丘陵の北側に営まれた恭仁京は、天平12(740)年から天平16(744)年にかけて日本国の首都でした。しかし、恭仁京の実態は不明で、『続日本紀』等の文献から、天皇の住まう内裏や主要官衙のある恭仁宮と左京が木津川市の旧加茂町域に、右京が旧木津町・山城町域に想定され、歴史地理学者や考古学者によっていくつかの復元案が示されてきました。足利健亮氏による復元案(第2図左)が代表的なものですが、報告者も別の復元案を提示したことがあります(第2図右)。恭仁宮については桐井さんの発表に委ねることとして、近年、恭仁京の推定右京域で大きな成果のあった遺跡を紹介します。

**上狛北遺跡** 木津川市山城町上狛宝本・西浦代ほかに所在します。奈良山丘陵の北側を流れる木津川をさらに北へ渡ったところに位置します。調査の結果、奈良時代中頃の掘立柱建物4棟、溝5条、井戸1基、廃棄土坑1基などが検出されました(第3図)。出土した遺物は、まさに恭仁京の時代からその直後にかけてのものでした。上狛北遺跡の調査で注目されるのは、廃棄土坑と考えられるSX96から出土した木簡です。3点出土し、そのうち1点に「讚岐國鵜足郡少領□(以下欠損)」と書かれていました(第4図)。「讚岐國鵜足郡」は現在の香川県丸亀市を中心に存在し

た古代の郡で、鵜足郡から上狛北遺跡にあった施設もしくは人物宛に送られた文書木簡と考えられます。国郡名が記載された木簡が送付される宛先としては、宮都や高級貴族の可能性が考えられます。また、一直線に延びる全長100mあまりの溝1条を検出しました。道路の側溝か、区画溝と推定されます。

**岡田国遺跡** おかだくに 木津川市木津馬場南・やいろ八色に所在します。調査の結果、奈良時代中頃の道路2条、掘立柱建物10棟、井戸2基などが検出されました(第5図)。岡田国遺跡では、道路2条が直角に交わる様子が確認されました。このような道路遺構が直角に交わる例は、都城における条坊制以外には考えにくいとの意見がありました。出土した遺物の中には、「越後」と墨書された須恵器もありました。

### 3. 集落

次に奈良山丘陵の北側に広がる集落を見てみましょう。実は奈良時代の集落の具体的な様子を知ることができる遺跡はほとんどありません。以下で紹介する遺跡も官衙やそれに準じるもの、あるいは有力者の居宅と考えられるもので、一般庶民の暮らす集落の様子を示すものでありません。

**上津遺跡** こうづ 木津川市木津宮ノ裏・宮ノ堀に所在します。木津川のほとりに営まれた遺跡で、奈良時代を通じて営まれましたが、中心的な時期は奈良時代の中頃と考えられます。調査の結果、掘立柱建物8棟をはじめ、柵、井戸、土坑など多数の遺構が検出されました(第6図)。注目されるのは東西方向にまっすぐ伸びる溝SD01で、総延長は180mに達します。この南側に三面廂付建物などがあります。出土した遺物と合わせて、本遺跡は、奈良時代の文献等に見られる「泉津」いづみのつであると考えるに至りました。「泉津」は、平城京に送られる物資の荷上げ港、すなわち外港と考えられています。こういった遺跡の性格を踏まえると、調査で見つかった掘立柱建物や溝は、泉津を管理するための官衙的な施設であったと考えられます。

**大島遺跡** おおしま 木津川市相楽大畑・おんじょうだに音乗谷ほかに所在します。段丘上に立地する遺跡で、奈良時代の遺構としては、掘立柱建物35棟、柵8条、井戸、溝などが検出されました(第7図)。多数の柱穴を検出したことから、もっと多くの掘立柱建物が存在したと考えられています。掘立柱建物群は重複していますが、建物の主軸の違いから6つ程度のグループに分けることができました。掘立柱建物の配置には、計画的な配置が認められることや出土した遺物の様相などから、南方約300mに位置する音如ヶ谷おんじょうがたに窯跡と一体となる瓦生産工房であった可能性が指摘されています。ただし、多数の建物群が存在することから、集落が含まれていた可能性もあります。

**畑ノ前遺跡** はた まえ 相楽郡精華町植田新田・畑ノ前に所在します。奈良山丘陵から少し離れ、推定される恭仁京右京域にも含まれませんが、掘立柱立物が多数見つかった例として取り上げます。奈



良時代の遺構としては、掘立柱建物23棟をはじめ、井戸や溝、土坑などが検出されました(第8図)。掘立柱建物群は重複していますが、建物の主軸の違いから大きく5つのグループに分けることができました。掘立柱建物は、計画的な配置があることや総柱建物が確認できるなどから、有力者の居宅の可能性が指摘されています。出土した遺物より、奈良時代前期から中期にかけて営まれたことが明らかになりました。

#### 4. 窯跡(生産遺跡)

奈良山丘陵の北側、旧木津町側の丘陵の縁に沿って、瓦を焼いていた多数の窯跡の分布が知られています(第9図)。発掘調査の結果、これらの窯跡で焼かれた瓦の大半が平城宮や平城京内の各所、あるいは興福寺などの寺院に運ばれていたことがわかりました。また、窯跡だけでなく、これらの瓦を製作していた工房跡も見つかっています。

奈良山丘陵に所在する瓦窯跡は、平城京で使用される瓦を生産していたという、当時の瓦生産の実態を示す重要性を鑑み、木津川市に所在する音如ヶ谷窯跡・市坂瓦窯跡・梅谷瓦窯跡・鹿背山瓦窯跡と奈良市に所在する歌姫瓦窯跡と中山瓦窯跡の6窯跡が「奈良山瓦窯跡」の名称で国指定史跡に指定されています。

代表的な遺跡を以下に紹介します。

**市坂瓦窯跡・上人ヶ平遺跡** 木津川市州見台8丁目(旧住所：相楽郡木津町市坂上人ヶ平)に所在します。市坂瓦窯跡では少なくとも8基の窯跡が確認されています(第10図)。古くから知られていた窯跡で、出土した軒瓦を分析した結果、平城宮大膳職をはじめ、平城宮・平城京内に瓦を供給していたと考えられます。上人ヶ平遺跡は市坂瓦窯跡に隣接する遺跡で、発掘調査によって大規模な瓦製作工房跡が見つかっています。ここでは、粘土採掘をはじめ、瓦の製作、瓦の焼成を行っていた様子がうかがえました。年代的には恭仁京の時代よりも少し後の奈良時代後半ごろの遺跡です。

**中山瓦窯跡** 奈良市中山町に所在します。少なくとも13基の窯跡が確認されています。<sup>あな</sup>管窯から出現期の平窯への変遷を知ることができます。出土した軒瓦の分析から平城宮の第1次大極殿院の瓦を焼いていたことがわかりました。年代としては、平城京遷都当初から奈良時代前半にかけて営まれた窯跡と考えられています。

**瀬後谷瓦窯跡** 木津川市州見台7・8丁目(旧住所：相楽郡木津町市坂瀬後谷)に所在します。史跡には指定されていませんが、奈良山丘陵に所在する窯跡群の中では珍しく、瓦とともに須恵器の焼成も行われていたことがわかりました。時期的には奈良時代前半から中頃にかけてのものです。

奈良山丘陵の窯跡では、ほかに鹿背山瓦窯跡で須恵器の生産が行われていた可能性がある程度

で、大半は瓦のみを生産していました。奈良山丘陵やその周辺では、須恵器生産はほとんど行われていなかったと考えられていたのですが、ここ数年の調査や研究によって加茂盆地で須恵器生産が行われていたことがわかってきました(桐井さんの報告を参照ください)。

ところで、平城宮内で出土した木簡に「進上瓦三百七十枚 女瓦百六十枚 宇瓦百卅八枚 鎧瓦七十二枚 功卅七人 十六人各十枚 廿三人各六枚 九人各八枚」(表面)と書かれたものがありました。合わせて370枚の瓦を47人で運んだ際の、種類ごとに何枚ずつ運んだかが記載されています。この木簡に記された瓦はどこから運ばれたものかわかりませんが、平瓦1人10枚、軒丸瓦1人6枚、軒丸瓦1人8枚を運んでいます。奈良山瓦窯跡からも山を越えて瓦を運んでいったはずですので、その苦労をうかがうことができます。また、木簡には「佐紀瓦司」「佐貴瓦山司」「瓦屋司」と書かれたものもあり、瓦生産が官の監督のもと行われていた様子もうかがえます。ちなみに「佐紀・佐貴」の地名は現在の平城宮跡が所在する「奈良市佐紀町」として行政区画名として残っています。

## 5. まとめ

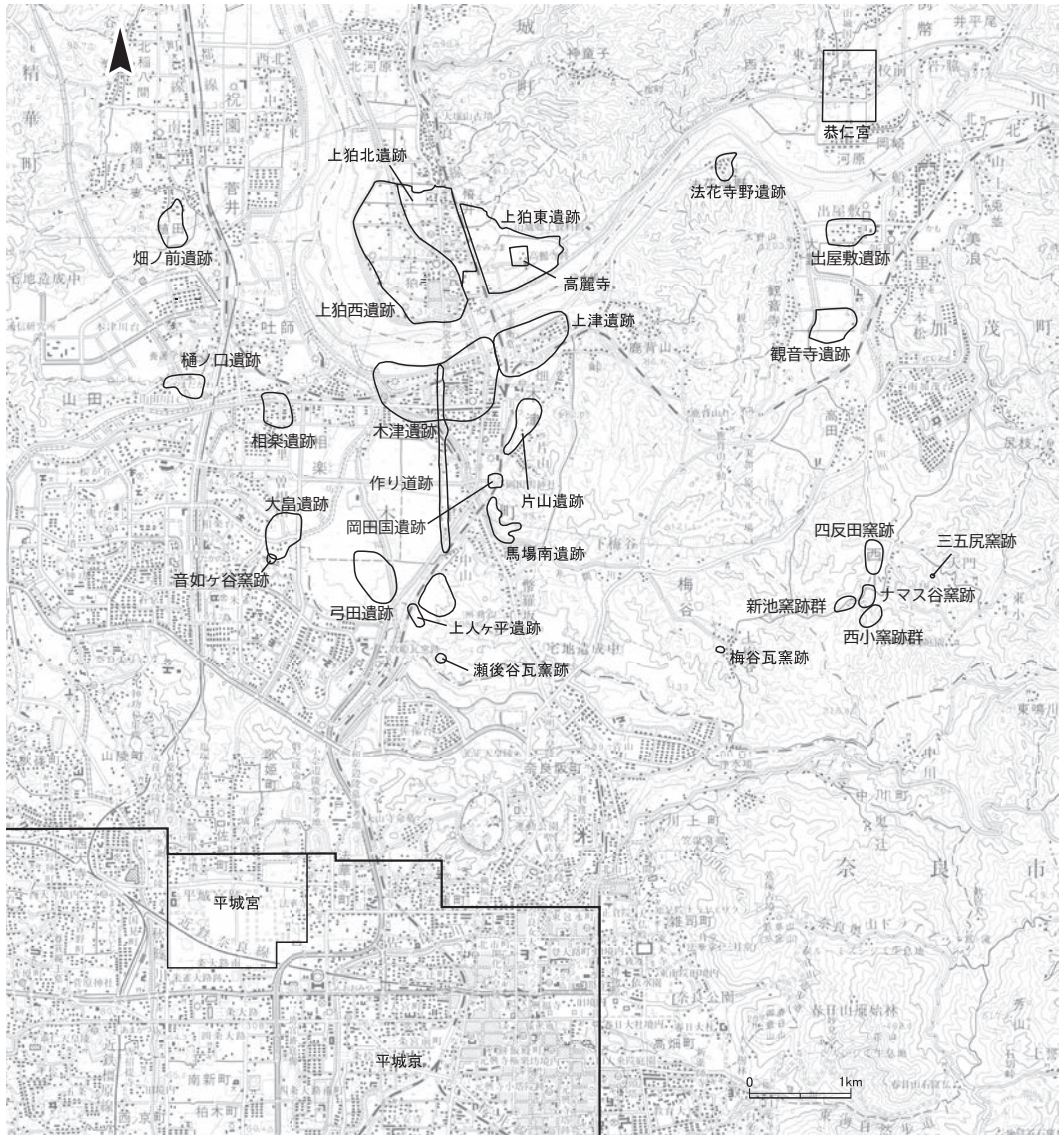
以上、奈良山丘陵の北側に広がる遺跡をいくつか紹介しました。

まず注目されるのは、平城宮・京の北側では奈良時代を通じて多数の瓦を生産していた窯跡が多数営まれているということです。宮都の造営において、瓦は平城宮や寺院などを荘厳化する重要な道具であり、その生産を大量に行える体制が、この奈良山丘陵の北側に営まれていたことがうかがえます。この場所が選ばれた理由は、平城宮・京から、低い山越えで到達できる距離の近さであったことは、容易に想像することができます。また、当時の木簡の内容からも瓦を運んでいた様子をうかがうことができます。

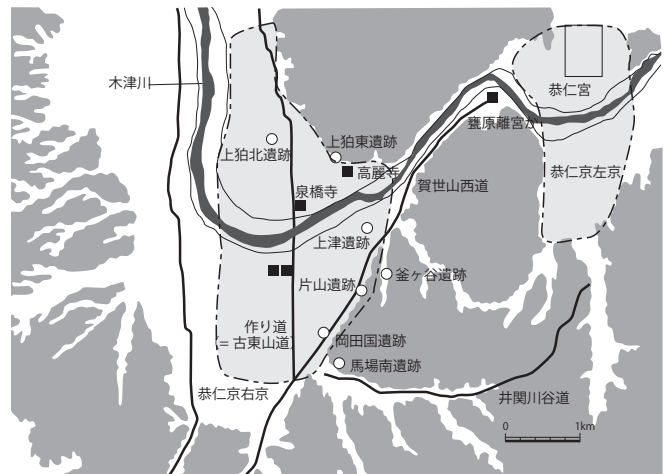
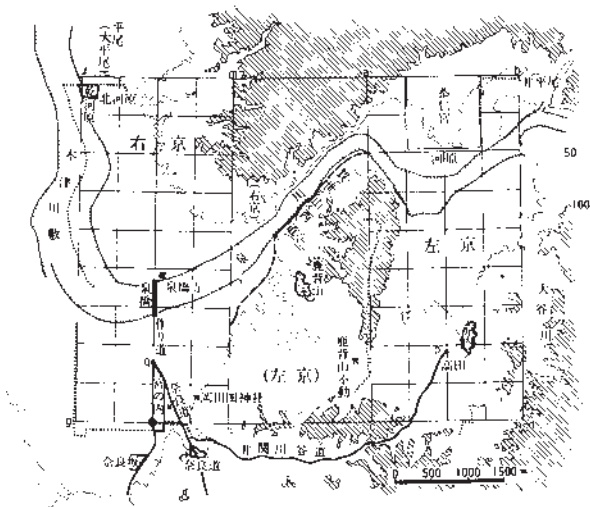
これまで奈良山丘陵の北側では、瓦生産を中心とした遺跡群の広がり「泉津」のような平城京と不可分の遺跡(この場合は、平城京の外港という位置付け)などが注目されてきましたが、近年の調査研究によって、瓦生産だけでなく土器生産もこの奈良山丘陵の一角で行われていたことがわかってきました。その詳細や意義づけは桐井さん、神野さんの報告でより詳しくご紹介いただけますが、平城京を中心に見た時、近くには瓦窯跡群が、遠くに須恵器窯跡群があることになります。これは、重量物である瓦の運搬がしやすいように近くで生産され、比較的軽量の須恵器が遠くで生産されるという、とても機能的な配置がされていると考えられます。

近年の調査研究で明らかになってきた須恵器生産の資料から、平城宮・京と奈良山丘陵に広がる遺跡群との関係に、新たな成果を加えることができるのではないのでしょうか。

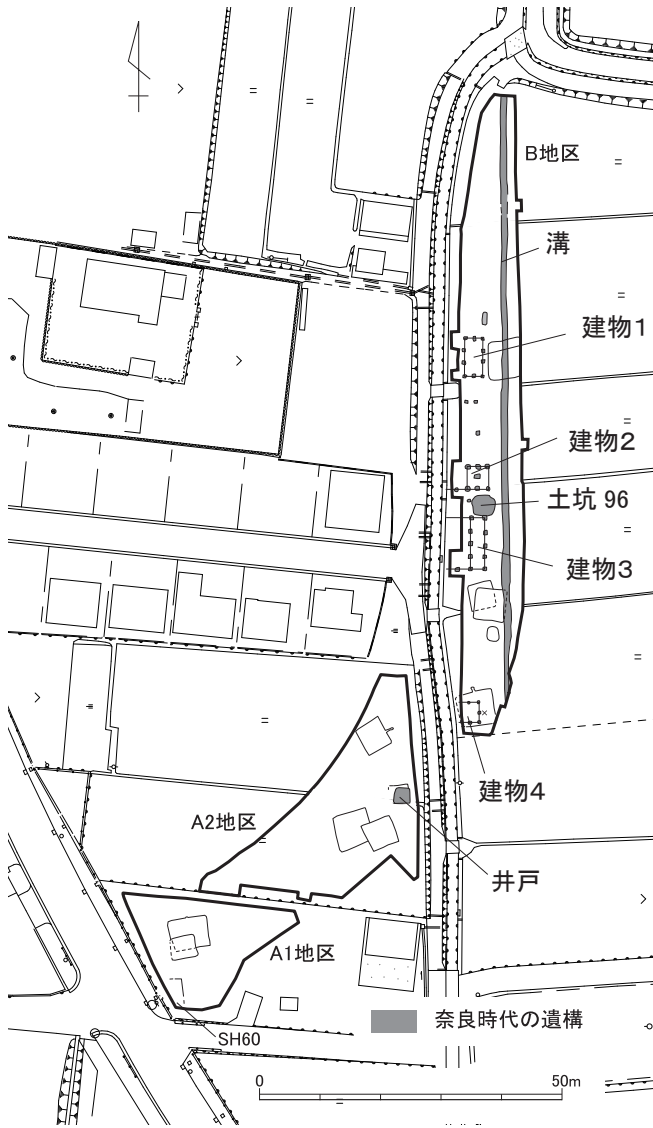




第1図 奈良山丘陵周辺の主要遺跡分布図



第2図 恭仁京域復元図(左：足利説、右：報告者案)

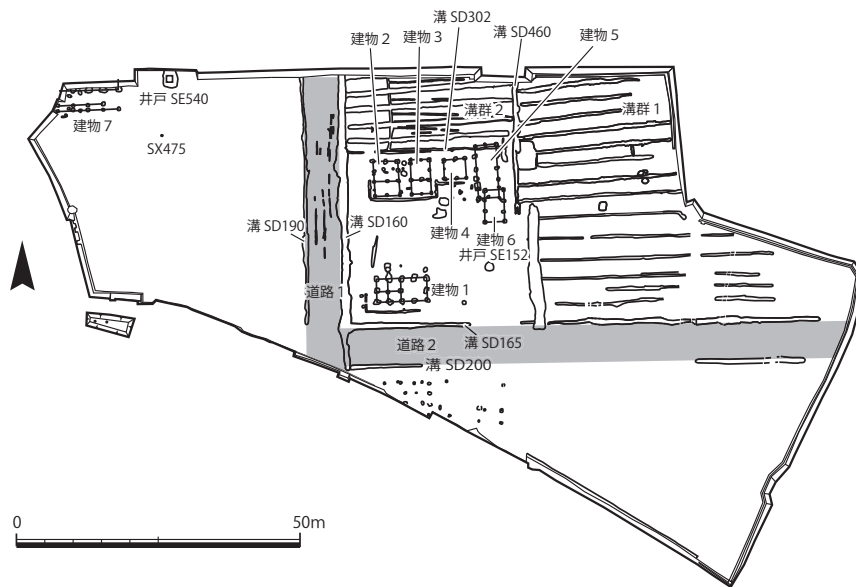


第3図 上狛北遺跡遺構平面図



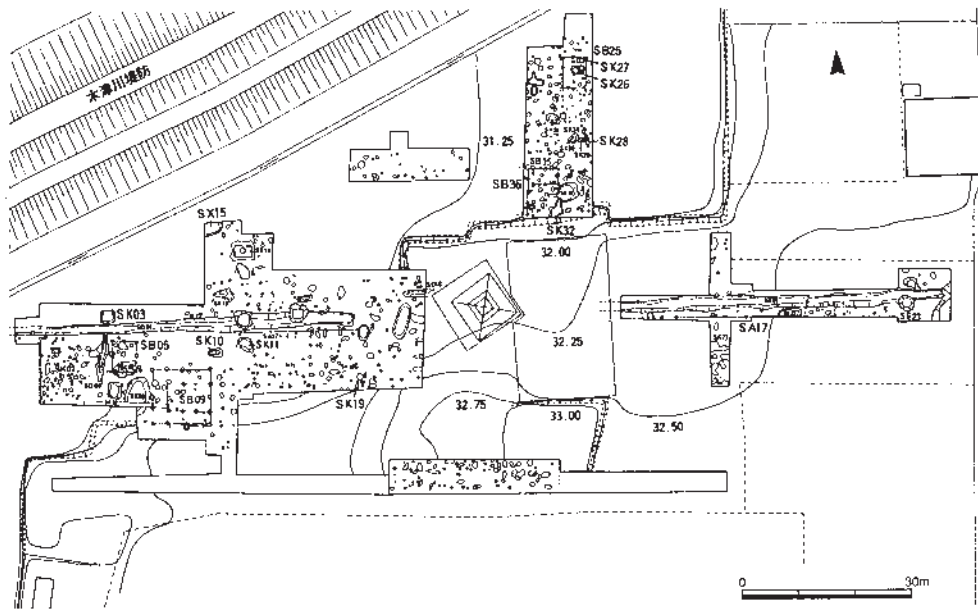
讃岐國鵜足郡少領

第4図 上狛北遺跡出土木簡

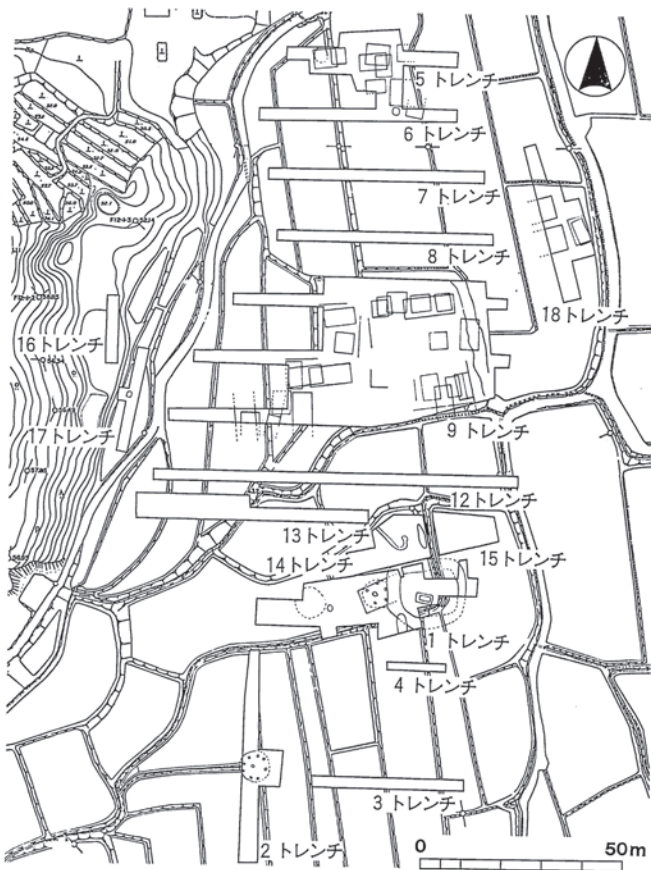


第5図 岡田国遺跡主要遺構平面図





第6図 上津遺跡主要遺構平面図



第7図 大島遺跡主要遺構平面図

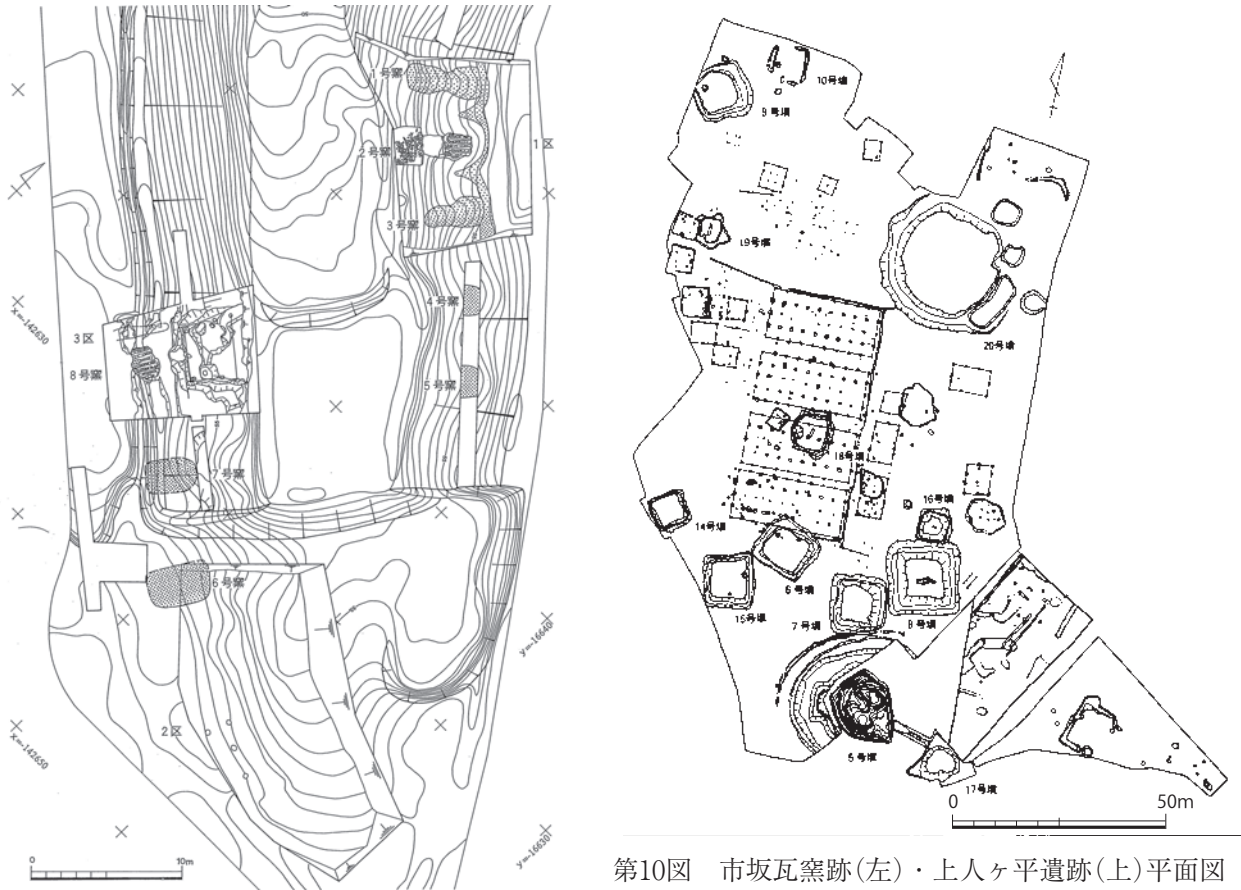


第8図 畑ノ前遺跡主要遺構平面図



- |          |                 |           |           |          |
|----------|-----------------|-----------|-----------|----------|
| 1. 梅谷瓦窯  | 2. 市坂瓦窯         | 3. 歌姫瓦窯   | 4. 音如ヶ谷瓦窯 | 5. 歌姫西瓦窯 |
| 6. 山陵瓦窯  | 7. 奈良山 51・52号瓦窯 | 8. 中山瓦窯   | 9. 押熊瓦窯   | 10. 乾谷瓦窯 |
| 11. 得所瓦窯 | 12. 歌姫西瓦窯       | 13. 瀬後谷瓦窯 |           |          |

第9図 奈良山丘陵の瓦窯跡分布図



第10図 市坂瓦窯跡(左)・上人ヶ平遺跡(上)平面図



# 幻の都と幻の焼き物の里

京都府教育庁指導部文化財保護課  
桐井理揮

## 1. 恭仁宮とは

楯並めて 泉の川の 水脈絶えず 仕へまつらむ 大宮処 (『万葉集』巻十七)

京都府と奈良県の境に近い木津川市加茂町の<sup>みかのほら</sup>瓶原地域には、現在でも美しい田園風景が広がっています。万葉集にはこの地の景勝を詠んだ歌が残されています。

天平12(740)年からの6年間、聖武天皇は宮を転々とします。天平12(740)年12月、聖武天皇によって恭仁宮造営が開始され、平城京から都が遷されました。役人に平城宮から恭仁宮に引っ越すように命じ、<sup>だいごくでん</sup>大極殿や回廊などの大きな建物も恭仁宮に移築されました。

恭仁宮では「<sup>こんでんえいねんしざいほう</sup>墾田永年私財法」や「<sup>こんりゆうみことのり</sup>国分寺建立の詔」など、現在でも多くの方が一度は聞いたことがあるような法令が定められるなど、歴史上の重要な舞台となりました。



第1図 恭仁宮跡と今回の関連遺跡(1/75,000)

## 2. 恭仁宮跡の発掘調査

昭和48年度から続く発掘調査によって、恭仁宮跡や山城国分寺跡の姿が次第にわかりつつあります。恭仁宮は東西約560 m、南北約750 mの規模で、「大垣」と呼ばれる大規模な築地塀ついでいに囲まれていました。発掘調査が始まるまでは、1 km四方と考えられていたので、想定よりもずいぶんコンパクトな宮であったことが判明しました。

宮の内部の施設については、第2図のように、5つの区画が確認されています。

**内裏地区**だいり 天皇が住まいし、儀式などが行われた場所を内裏といいます。恭仁宮では、東西約100m、南北約125mの規模の「内裏西地区」、東西約110m、南北約140mの「内裏東地区」の2つの区画があったことがわかっています。内裏がふたつ並び立つ様相は他の宮都では認められない恭仁宮の特徴といえます。

**大極殿院地区**だいくでんいん 大極殿院とは、宮の中心的な建物である大極殿を取り囲む空間です。恭仁宮の大極殿と大極殿院の回廊は、平城宮から移築したということが『続日本紀』しよくにほんぎに書かれています。平成18・19年度の調査で、大極殿院の回廊の北西隅が一部が見つかっており、平城宮の大極殿院回廊と同じ規格であったことがわかりました。

**朝堂院・朝集院地区**ちょうどういんちょうしゅういん 大極殿院の南側には、朝堂院・朝集院という区画が並びます。朝堂院は高官が執務や儀式を行う当時の政治の中心となる場所です。令和3年度の発掘調査で朝堂院の北東隅が見つかり、朝堂院は東西約117m、南北約99mの規模であることが判明しました。朝集院は、官人が儀式の際に服装を整え、待機するところです。規模は東西約134m、南北約126mです。朝堂院・朝集院とも、南辺中央には門が見つかっています。

恭仁宮の構造がかなり明らかになったことを受け、京都府教育委員会ではこれまでの調査成果をまとめる報告書を作成しています。今回の報告では、その一部として、出土した土器の整理の成果を報告したいと思います。

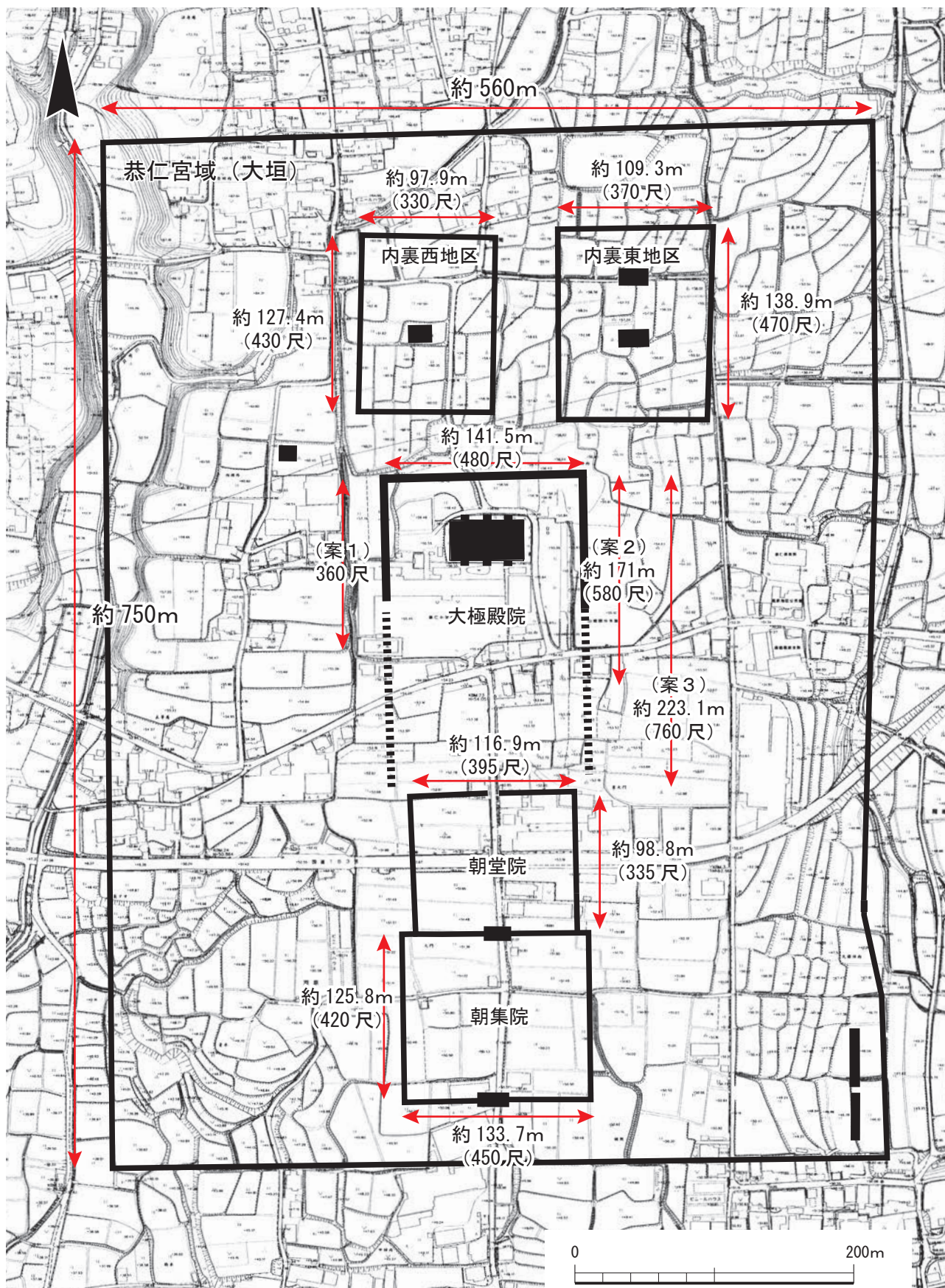
## 3. 恭仁宮跡の土器

**土師器と須恵器**はじき すえき 古墳時代以降、日本列島の広い範囲では、土師器と須恵器という大きく2種類の土器が用いられました。

土師器は、縄文・弥生土器に系譜がある伝統的な土器です。軟質で赤っぽい焼き上がりをしており、表面はザラザラしています。土師器は窯ではなく、野天のてんで酸化焰焼成さんかえん（燃料が完全燃焼するだけの十分な酸素がある状態で土器を焼き上げること）で製作されたと考えられています。

須恵器は、朝鮮半島に起原をもつ土器で、4世紀末に日本列島でも生産されるようになりました。堅く焼き締まり、ネズミ色をしています。窯など密閉度の高い施設を用いて、還元焰焼成かんげんえん（酸素が足りない状態で土器を焼き上げること）で製作されました。





第2図 恭仁宮の主要区画の規模

奈良時代の食器は、大きく土師器と須恵器の2種類があり、基本的には同じ形・大きさの物がどちらにもあることが特徴です。食器以外に、水漏れしにくい須恵器は貯蔵用の土器(壺・甕)が、火にかけても割れない土師器は煮炊用の土器(甕、鍋)が作られました。

**奈良時代の土器の編年** 文字の記録がない時代の歴史は、遺物の形やセットを基準に並び替えることで、古い新しいを判断し、年代を組み立てていきます。これを、考古学では「土器編年」と呼びます。

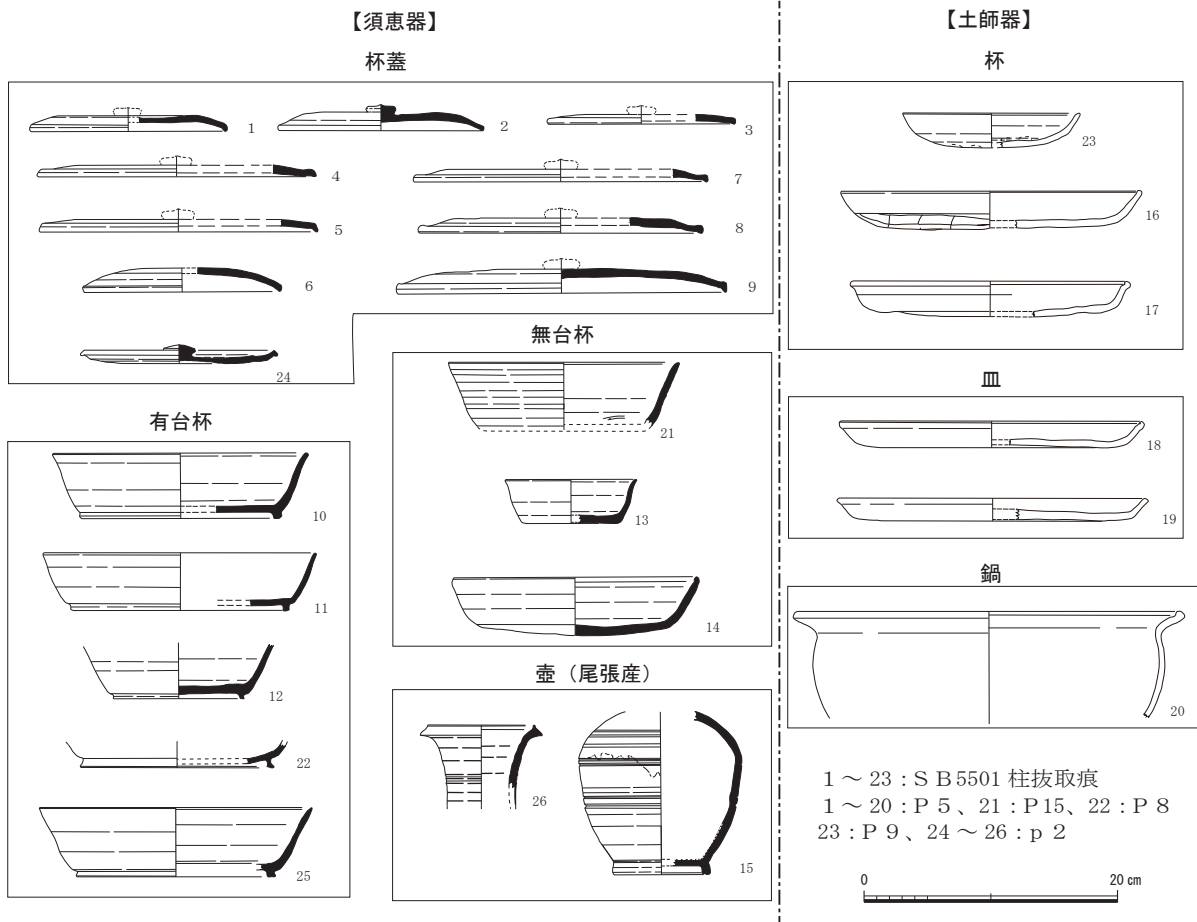
奈良時代前後の土器については平城宮・京で出土した土器を基に、平城宮土器ⅠからⅦまで7段階に大別されています。土器と一緒に出土した木簡もっかんの年代から、大体の実年代がわかっており、当初は平城宮土器Ⅱが730年前後、平城宮土器Ⅲが750年前後と考えられてきました。発掘調査や土器の研究が進んだ現在は、「平城宮土器Ⅲ」と呼ぶ時期はさらに2から3段階に区別でき、そのうち中段階が恭仁宮の時期にあたります(玉田1995)。奈良時代の土器は平城宮土器Ⅲ中段階を境に、食器の作り方が省力化され、種類も少なくなることがわかっています。小難しい言葉で表現すると、聖武天皇が宮を転々としたという歴史事象と、土器様式が大きく変化する時期が一致しており、この時代の土器を研究することで、当時の社会情勢にも言及することができる可能性があるといえます。そのため、恭仁宮跡しがらきのみやや紫香楽宮跡で出土する土器は研究者の間ではとても注目される存在なのです。

**恭仁宮跡の土器** 現在の土器研究では、「一括資料」をととても重視します。一括資料というのは、短時間に埋まったと考えられる遺物群のことで、一度にまとまって出土した量が多いほど年代を考える手掛かりが多くなります。実は、恭仁宮跡ではまとまって土器が出土することが少なく、どのような土器を使っていたのか、今一つ分かっていません。そのような中、現在行っている整理作業の中で新しい発見がありました。

第3図の土器は、昭和55年の調査で出土した一括資料です。その内容について、少し詳しく解説します。図の中で、右側が土師器、左側が須恵器です。須恵器の蓋は、口径に注目すると、3種類ほどの大きさがあるようです。この蓋は、有台杯(杯B)とセットになるものですが、やはりこれも3種類ほどの大きさがあります。なお、24は焼け歪みひず、反そってしまっているものです。現在ではジャンク品として不適格になりそうな製品ですが、奈良時代には普通に流通していました。また、無台杯(杯A、杯C)も3点あります。14は器の縁に注目すると、口が内側に向けて折り曲げられていることがわかります。これは土師器でよく見られる作り方で、形も土師器を模した形状になっています。

右列の6点は土師器です。17や18の縁に注目してみると、先ほどの14と同じような仕上げになっていることがわかるでしょうか。また、奈良時代前半の土師器は、水漏れを防ぐために「ミガキ」と呼ばれる技法を駆使しているため、器面に光沢が出ます。この技術は、省力化の流れで奈良時





第3図 内裏東地区 掘立柱建物 S B 5501の柱抜取痕跡から出土した土器

代後半には次第に廃れていきますが、今回の資料でもミガキをした土師器はありません。そのかわり、外側を刀子のような工具で整える「ケズリ」をした土器が1点だけありました。ケズリ技法は奈良時代でも後半に流行る手法です。

以上のように、この土器は奈良時代後半に流行る技術が先駆けて使われています。宮を解体した際に、柱を抜き取った穴からまとまって出土したもののなので、746(天平18)年1月に恭仁宮の造営を停止した前後に使われた土器である可能性が極めて高い資料といえるのです。今後、奈良時代の土器研究の基準となるような資料と言えるでしょう。

#### 4. 奈良山の須恵器窯

ところで、恭仁宮で使われた土器は、どこで生産されたものなのでしょうか。産地を特定することは容易ではありませんが、奈良時代には各地に須恵器を焼く窯があるので、近くの生産地から調達していると考えられています。その中でも、古墳時代以来日本列島でシェア1位の産地が、大阪府堺市・和泉市・岸和田市・大阪狭山市にある泉北(陶邑)古窯跡群です。平城宮・京でも陶邑産の須恵器が多く出土しており、都でもかなりの量が流通していましたが、最近の研究で、

より平城京に近い生駒山地東麓や奈良山でも須恵器を生産していることがわかってきました。

奈良山で須恵器生産が行われていたことが分かったのは近年になってからです。例えば、京都府内の窯業生産について総論的に論じた田辺昭三氏は、1981年の論文で、「山城盆地最南端の大和と接するあたりに平城宮造営に関連する瓦窯が点々と存在するが、須恵器は全く生産していない」と述べており(田辺1981)、奈良山は瓦の産地としては認識されていたものの、須恵器の産地としては無名の存在でした。

その後、須恵器の破片や窯体の一部が加茂町南部を中心に広く散布していることが判明し、須恵器の窯跡の存在が推定されるようになりました(山田1987)。高橋照彦氏は、奈良時代前半に山城国内に点々と分布していた須恵器の窯が奈良時代後半に衰退するのに対して、奈良山の窯跡群ではその時期に数が増えることから、平城宮や恭仁宮といった都へ須恵器を大量供給していたと考えています(高橋1992)。8世紀中頃には生駒山東麓や奈良山といった都城近郊で須恵器を生産し、効率よく都市部へ流通する体制が始まった可能性があります(北野2007)。

とはいえ、奈良山の須恵器窯の実態はほとんどわかっていません。これまで発掘調査が行われた須恵器窯は歌姫西窯跡と西柵窯跡<sup>にしくぬぎ</sup>の2基のみです。他の窯跡は、瓦窯に付属しているものであったり、耕作や雨による土砂流出などが原因で、地中に埋もれた須恵器が地表に散布した状態になったものを、地元教育委員会等が採取したことにより、窯があったと推定されているのです。そのような断片的な情報もふくめ、奈良山にあった須恵器窯について、現状でわかっているものをまとめたのが、付表2です。

付表1 山城国内の須恵器窯の消長(高橋1992を元に作成)

旧郡	窯跡群	600	700	800
愛宕	岩倉	—————		
	西賀茂	—————		
葛野	—			
乙訓	大原野	—————		
紀伊	深草	—————		
宇治	山科	—————		
	宇治	—————		
久世	宇治田原	—————		
綴喜	松井	—————		
	田辺	—————		
相楽	精華	—————		
	奈良山西部	—————		
	奈良山東部	—————		



最も西にある歌姫西窯から、最も東に位置する賢徳谷窯<sup>けんとくだに</sup>まで、東西9kmの範囲に17基が分布しています。笠置町でも1箇所窯の破片と須恵器小片が採取されており、本来の分布はさらに東に広がる可能性があります。詳しいことはわかりません。これは現状わかっている数なので、実際の数はもっと多かったことは確実です。この分布を見ると、いくつかのグループにまとまっています。1箇所目は、今の木津の市街地周辺(A)、2箇所目は鹿背山<sup>かせやま</sup>周辺(B)、3箇所目は赤田川の上流域(C)、4箇所目は加茂盆地の東側(D)です。

窯が使われた時期を詳しく検討してみると、Aは最古の歌姫西窯、大谷窯があり、飛鳥時代か

付表2 奈良山の須恵器窯の概要

地区	時期	窯名	窯の概要
A	飛鳥Ⅲ	歌姫西窯	奈良市歌姫町に所在する飛鳥時代後半の窯跡です。奈良文化財研究所の発掘調査で、6基の瓦窯と4基の須恵器窯が見つかりました。奈良山では最も西に位置する須恵器の窯で、最初に操業を始めた窯です。
	飛鳥Ⅴ 平城Ⅰ	大谷窯	1977年に岡田国遺跡の発掘調査が行われた際に、灰原が露出しているのが発見され、遺物が採取されました。飛鳥時代末から奈良時代初頭の窯です。
	平城Ⅲ	瀬後谷窯	京都府埋文センターが発掘調査を行った瓦窯ですが、灰原から須恵器が出土していることから、瓦窯を須恵器窯に作り変えたと考えられています。
B	平城Ⅲ ～Ⅳ	鹿背山瓦窯跡	発掘調査で見つかったのは、瓦窯のみですが、焼け歪んだ須恵器が捨てられたゴミ穴が見つかっており、付近に須恵器窯があったか、須恵器・瓦兼用の窯であると考えられます。
	平城Ⅰ	巾ヶ谷窯	鹿背山から加茂町観音寺へ抜ける谷筋の最奥部にある窯跡です。かつては丘陵斜面に灰層が露出し須恵器片が散乱していたとのことで、付近にはかなりの数の窯が存在すると予想されます。
	平城Ⅰ ～Ⅲ	池ノ上窯	詳細は不明ながら、奈良時代前半とみられる須恵器が採取されています。
	平城Ⅰ ～Ⅱ	節句田窯	詳細は不明ながら、奈良時代前半とみられる須恵器が採取されています。
C	—	四反田窯	加茂町(当時)の分布調査で確認された窯です。詳細はわかりません。
	平城Ⅱ ～Ⅲ	新池窯	赤田川の上流にある窯です。1961年の分布調査により2基の窯(奈良山36号、37号)が見つかったとされていますが、現在は確認できません。奈良時代前半の窯です。
	平城Ⅱ ～Ⅲ	西小窯	1961年の分布調査により2基の窯(奈良山38号、39号)が発見されました。いずれも灰層や須恵器片が確認されており、奈良時代前半の窯と考えられます。
	平城Ⅲ? ?	ナマス谷窯	詳細は不明ですが、採取された須恵器から奈良時代中頃の窯と推定されます。
	平城Ⅱ ～Ⅲ	西小田原窯 (浄瑠璃寺)	浄瑠璃寺の発掘調査で、生焼けの須恵器が出土しており、奈良時代の窯があったと想定されます。
	平城Ⅲ ～Ⅳ	三五尻窯	崖面が雨水で流出した際に、須恵器や灰原が露出しているのが確認された窯跡です。須恵器は杯類の他、多種多様な壺が出土しており、奈良時代中頃の窯と推定されます。
D	平城Ⅱ ～Ⅲ	西柵窯	加茂町教育委員会による発掘調査の結果、登窯1基が見つかりました。灰層や窯壁片と多量の須恵器が確認され奈良時代前半～中頃に操業されたことが分かりました。
	平城Ⅱ ～Ⅲ	栗田窯	赤田川中流域にある窯です。1961年の分布調査により灰層が確認されており、須恵器が採取されました。詳細はわかりません。
	平城Ⅲ	賢徳谷窯	里道開削中に灰原が露出しているのが発見され、新規に周知された窯です。本来は少なくとも2基存在したようですが、地形の改変が著しく詳細は不明です。
—	—	(笠置)	笠置町でも、開墾に伴い窯の破片と須恵器が採取されており、奈良時代の窯があったと推定されます。

ら奈良時代初頭が中心です。それに対して、Bは奈良時代前半から中頃、C・Dは奈良時代中頃に中心があることが分かりました。つまり、奈良山の須恵器窯は奈良時代に入るまでは木津地域で細々と須恵器を焼いていたものが、奈良時代になると、加茂盆地周辺に生産が移り、奈良時代中頃にピークを迎えると考えられます。奈良時代前半には、A地域では平城京向けの瓦生産が始まっており、輸送コストが高い瓦をより平城京に近いA地域で生産し、輸送コストが安い須恵器はやや離れたB・C・D地域で生産したと考えられます。

次に製品に注目してみます。<sup>さんごじり</sup>三五尻窯では直径20cmを越えるような大型の食器が多く出土しており、豊富なサイズの製品を生産していました。賢徳谷窯では、皿の縁を摘まみ上げることが特徴的な皿が出土しています。いずれも、都城とその周辺でしか見られない特徴で、農村向けではなく、都城向けに製品を作っていたとみられます。また、唯一発掘調査で様相がわかっている西柵窯跡は、<sup>すずり</sup>硯や仏器を模した鉢、大型の<sup>ぼん</sup>盤(洗面器のような大きさの鉢)など、やはり都城や役所等が供給先とみて間違いのないでしょう。

その一方で、大型の容器(甕)は、西柵窯跡などを除き、ほとんど出土していません。したがって、高い焼成技術が必要な大型の容器の多くは陶邑などから調達し、奈良山では都城で大量に消費する食器類を中心に製作していたと考えられます。

## 5. まとめ

このように、奈良山の須恵器窯群は平城京や恭仁宮といった都城と密接に結びつくことで、須恵器の一大産地となりました。しかし、都が長岡京に遷る頃には、これらの須恵器窯は一斉に姿を消します。代わりに須恵器の産地として台頭してきたのが、亀岡市の篠窯業生産遺跡群(篠窯)です。その後、奈良山の須恵器窯群の存在は長く知られることはなく、幻の存在となりました。現在、奈良時代の一時にだけ須恵器の一大産地であったこれらの窯の研究は始まったばかりです。ぜひ、今後の研究に期待していただければ幸いです。

### 【参考文献】

北野博司2007「律令国家転換期の須恵器窯業」『国立歴史民俗博物館研究報告』第134巻

神野 恵2021「平城京近郊窯の須恵器生産」『奈文研論叢』第2号 奈良国立文化財研究所

高橋照彦1992「山城における古代窯業生産」『岩倉古窯跡群』京都大学考古学研究会

田辺昭三1981「京都の古代・中世窯」『日本やきもの集成』5 平凡社

玉田芳英1995「平城宮土器編年の細分」『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』奈良国立文化財研究所

山田邦和1987「山城の須恵器生産」『煤谷川窯址・畑ノ前遺跡』精華町教育委員会

京都橘大学考古学研究室「日本古代土器の基礎知識」(<https://haji-sue.jp/>)

# 平城京の人々の暮らしを支えた奈良山丘陵

独立行政法人奈良文化財研究所  
神野 恵

## 1. はじめに

奈良山丘陵での須恵器生産については、かねてより植野浩三(植野2000)や重見泰(重見2002)らによって注視されてきたが、発掘調査による確認事例が少なく、どの時期に、どのような製品を、どの程度の規模で焼成していたのか?といった具体的な内容は謎に包まれていた。

平城宮や平城京、寺院から出土する須恵器は、基本的には古墳時代以来の巨大生産地である和泉陶邑古窯跡群の製品が運ばれていたとの見方が、修正されることなく定説化していた。しかし、窯跡の分布調査などで採集された資料と窯跡の発掘調査などから、奈良山から生駒にかけての平城京近郊において、これまで想定されていた以上に、須恵器生産がおこなわれていたのではないかと考えるようになった。

奈良時代の奈良山丘陵は、まさに5万人とも10万人とも言われる人口を抱える平城京の物資運搬ルートである木津川と港である「泉津」を抱え、和同開珎を鑄造した鑄銭司や数々の瓦窯が置かれた工業地帯である。そのなかにあつて、須恵器生産は東寄りの加茂盆地が中心であると予想しているが、この地域は大規模な住宅開発などが比較的少なく、窯跡がまだ見つからない可能性が高い。今後、こういった奈良時代の平城京に関わる遺跡が見つかる可能性はきわめて高いとも言える。

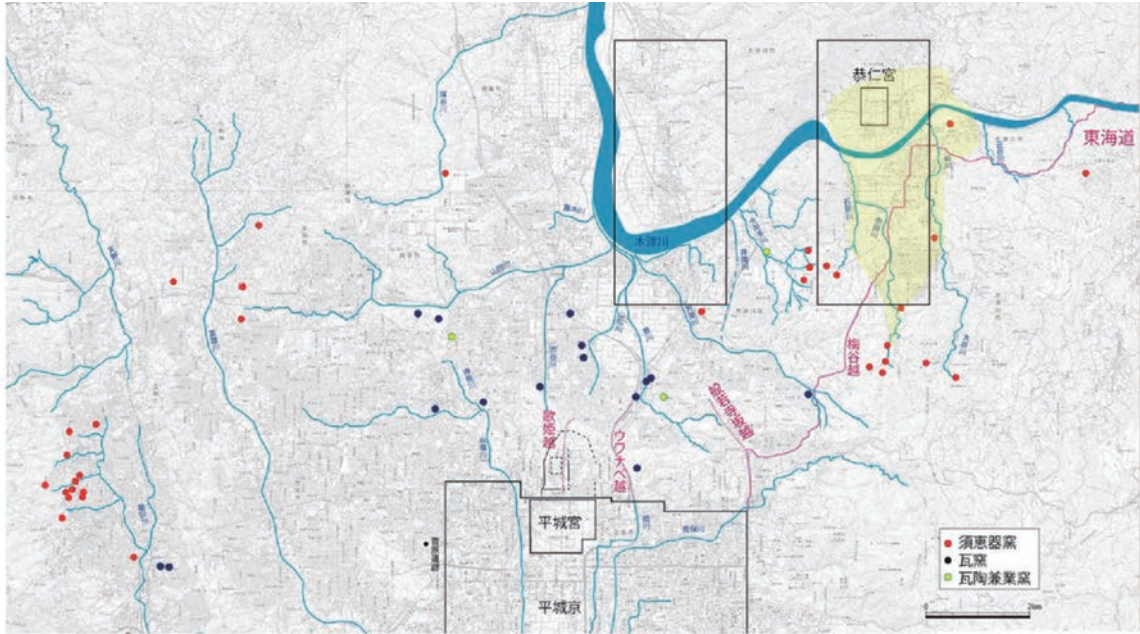
地下に埋没している文化財は、保存・活用を通して地域を活性化させるポテンシャルを有する貴重な財産である。須恵器生産を通して、加茂盆地を中心に、平城京造営と奈良山丘陵の歴史を考えてみたい。

## 2. 「みかの原」は甕原、瓶原

みかの原ら わきて流るる いづみ川 いつ見きとてか 恋しかるらむ

百人一首にも選ばれたこの有名な歌は、平安時代に藤原兼輔が、恋心を詠んだ情熱的な歌として有名であろう。この「いづみ川」が現在の木津川、かつて恭仁京が置かれていた場所は「みかの原」と呼ばれ、「いづみ川」はそこを「わきて流るる」のである。この「わきて流るる」の解釈は「みかの原から湧き出て流れる」という意味と、「みかの原を分けて流れる」という意味、あるいは、その両者の意味をかけていると説明される場合が多い。藤原兼輔のように平安京に住





第1図 平城京とその近郊の窯跡分布

んでいる人々にとって、木津川は青山高原などを水源として大阪湾に注ぐことは、もちろんわかっていたであろうが、湧き出てくる恋心を表現するために「みかのほら」から湧き出て・・・と解釈すればわからなくもない。また、後者の「みかのほら」を分けて流れていたという解釈は、歴史地理学的にも考古学的にも魅力的である。なぜなら、遺跡地図をみると「みかのほら」に置かれた<sup>くにきょう</sup>恭仁京は、木津川によってまさに分けられているようにみえからである(第1図)。

「みかのほら」が文献資料に登場するのは、『続日本紀』和銅6(713)年6月23日条。ここには「<sup>ぎょうこう</sup>行幸<sup>かめ</sup>甕原<sup>へい</sup>離宮」とあり、時の女帝、元明天皇が<sup>げんめい</sup>甕原<sup>みかのほら</sup>離宮に行幸したことが記されている。和銅7(714)年にも元明天皇が甕原離宮へと行幸していることをみると、この時期にはすでに甕原離宮は成熟した宮殿として整備されていたのであろう。

しかし、この「みかのほら」の地名の成り立ちについては、よくわかっていないようである。漢字では「甕原」とも「瓶原」とも当てられている。地名事典などで調べると、加茂盆地の形状が、<sup>かめ</sup>甕<sup>へい</sup>や瓶の形を呈しているからだろう(第1図の黄色部分)といった説を述べているものもあるが、やや強引な印象を受けると言わざるをえない。

『<sup>えんぎしき</sup>延喜式』や『<sup>しょうそういんもんじょ</sup>正倉院文書』など用いた古器名比定の研究(巽1986)によると、「ミカ(美加)」は丸底の須恵器甕(奈文研分類の甕A)、「ユカ(由加)」は平底の須恵器甕(奈文研分類の甕C)を指す場合が多いと考えられる(第2図)。瓶と書いて「ミカ」とも読むように、広義には液体を貯蔵、運搬する須恵器の容器を指していたと考えてもよからう。

結論からいうと、私は加茂盆地に「みかのほら」離宮を置いた理由は、この地を須恵器の生産地にしようという計画があったためと考えている。昨今の発掘調査の成果から、平城京造営には高度な計画性が看取できることがわかりつつある。ここでは奈文研の発掘調査を中心に、平城京造営と奈良山の関係から考えてみたい。





第2図 須恵器の甕A(美加)と甕C(由加)

## 2. 平城京を造る

平城京は本格的な中国式都城として造営され、本格的に機能したとみられる初めての都城である。本格的な中国式都城として造営されたのは、橿原市にある藤原京であるが、この藤原京は16年間という短期間で廃され、平城京へと遷都された。

16年という時間幅は、大変示唆的であると私は考える。なぜなら、藤原京造営に関わった技術者たちの多くが、現役で平城京造営に関わることができるためである。まるで技術伝承の場を兼ねる伊勢神宮の式年遷宮しきねんせんぐうのように…。そのような視点からみると、恭仁京造営に関わった人々は、紫香樂宮しがらきのみやや平城京遷都かんとに関わることができただろうし、長岡京造営に関わった技術者は平安京の造営に関わることができただろう。

奈文研による藤原宮の発掘調査では、造営に際して大極殿の近くに物資運搬用の運河を開削していることが明らかとなった。藤原京造営のための材木は、近江国田上山たなかみやまから瀬田川、木津川の水運を使って運ばれ、木津川市木津宮ノ裏こうづの上津遺跡に比定されている泉津で荷あげされ、陸路で藤原京に運ばれたと考えられている。藤原宮では発見された運河が、どこからどこにつながる運河であるのか、まだはっきりとはわかっていないが、材木を筏のように組んで水運を用いて運んだと推定されている。

宮都造営に必要な建材は木材ばかりではない。大極殿だけでも、その屋根には約10万枚ともされる瓦が必要であった。瓦を作ることも大変であるが、運ぶのも大変な労力だった。このような瓦などの重量物も、運河を使って運ばれたのであろう。

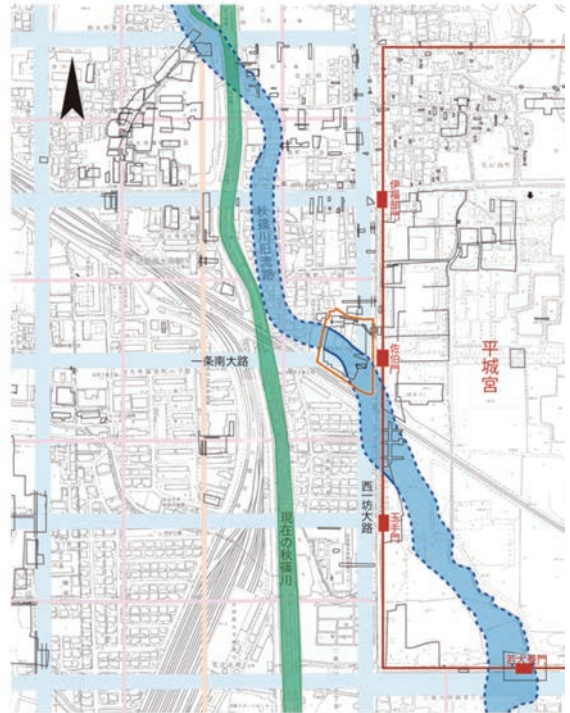
藤原宮・京の造営時には運河を造って物資を運搬したようであるが、平城京では埋め立てる予定の自然河川を運河として利用していたことがわかった。平城京が置かれた「奈良」の地は、決して平らな場所ではなかった。ここに宮都を造るために、谷地を埋め、古墳を削り、河川を付け替える必要があった。このような大規模な造営工事の実態が、近年の発掘調査によって明らかになっている。現在の秋篠川はほぼ北から真南に流れる河川であるが、かつては北西から南東方向

に蛇行しながら流れていた(第3図青色)。これを平城京造営時に条坊に沿った南北まっすぐの河川に掘り直したのが、現在の秋篠川(第3図緑色)である。

2018年の奈文研本庁舎の建替え工事に先立つ発掘調査で、敷地(第3図オレンジ色)の大部分が、埋め立てられた秋篠川旧流路にかかることがわかったのである。さらに、この旧河川はすぐに埋め立てられたわけではなく、平城宮造営工事中は整備して物資運搬用の運河として利用していたこともわかった(第4図左)。この秋篠川の旧河川は埋め立てたうえで、平城宮に西面正門にあたる佐伯門を作らなくてはならなかった。そのため、旧流路および運河は、敷葉・敷粗朶工法しきば しきそだと呼ばれる、葉っぱや粗朶(枝)を敷き込んだ工法を用いて埋め立て工事が行われていることがわかった(第4図右)。このような工法は、古墳時代から確認されており、大阪府狭山池の堤や北部九州・大宰府の水城みづきなどにも用いられていることがわかっている。効果としては、土層のズレを防ぐ目的や湿気抜き目的があったと推定されている。

この旧流路とそれを踏襲した運河は、北西から流れこみ、平城宮の西南隅を通過して南へと流れていたと推定できる(第3図青色)。この運河は、主に瓦を運ぶ運河だった可能性が高いと考える。なぜなら、この上流には、第一次大極殿の瓦を焼いた中山瓦窯(奈良市中山町)があるためである。

中山瓦窯跡は、昭和47年(1972)の発掘調査で発見され、平城宮第一次大極殿院の造営に瓦を供給した窯であることがわかった。奈良山丘陵でも比較的早い時期に操業された瓦窯である。窯は造り替えを含めて10基が確認されており、奈良時代初頭、恭仁京へと都が遷されるまで、つまり奈良時代前半に平城宮に瓦を供給した窯と推定されている。



第3図 奈文研庁舎(橙)と秋篠川の現流路(緑)、旧流路



第4図 奈文研庁舎の発掘調査で見つかった旧秋篠川の運河(左)とその埋め立て工事の敷葉敷粗朶(右)

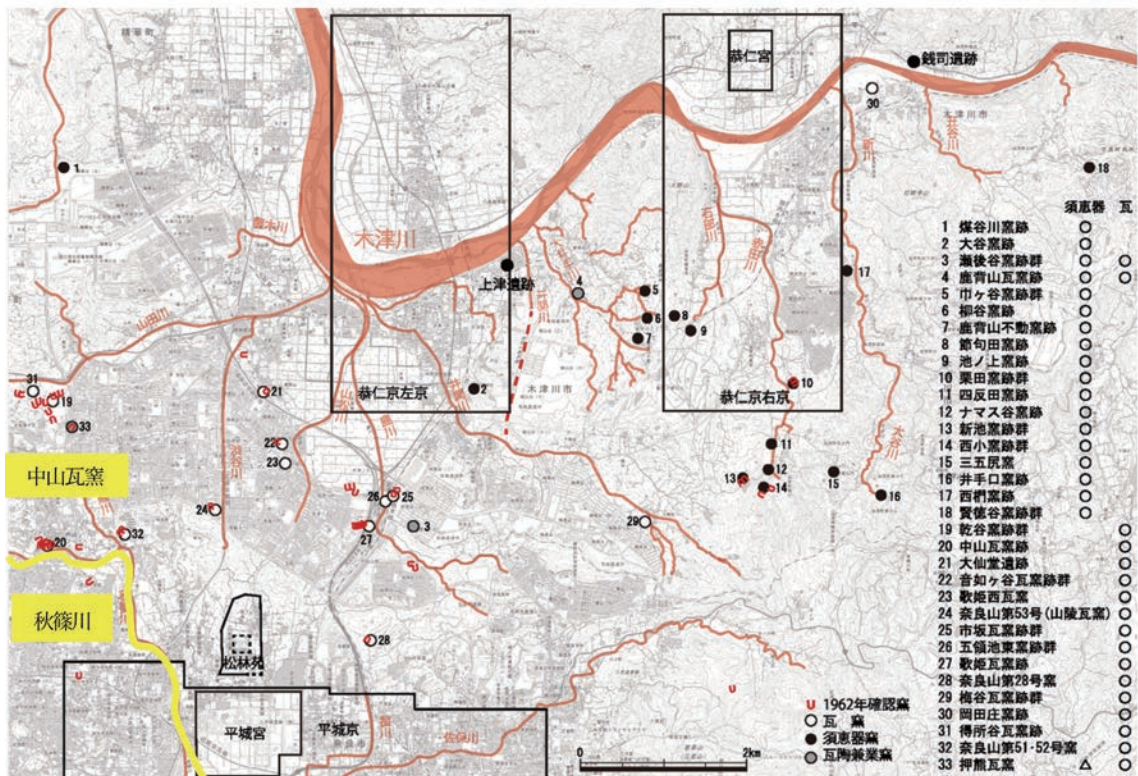




第5図 中山瓦窯の窯SY340



第6図 中山瓦窯から出土した鬼瓦



第7図 奈良山丘陵の須恵器窯と瓦窯の分布

このほかにも、奈良山丘陵の西側には、平城宮や平城京の造営に必要だった瓦を焼成した窯が多く見つかっている(第7図の白丸)。それに対し、須恵器の窯は奈良山でも東側に偏ることがわかる(第7図の黒丸)。この排他的な関係は、土器と瓦の製造が、原材料の粘土と燃料の薪を取り合うこととを暗示すると考える。つまり、平城京を造る時に、すでに計画的に、奈良山の西側では瓦を、東側では須恵器をつくるのが計画されていたのではあるまいか？

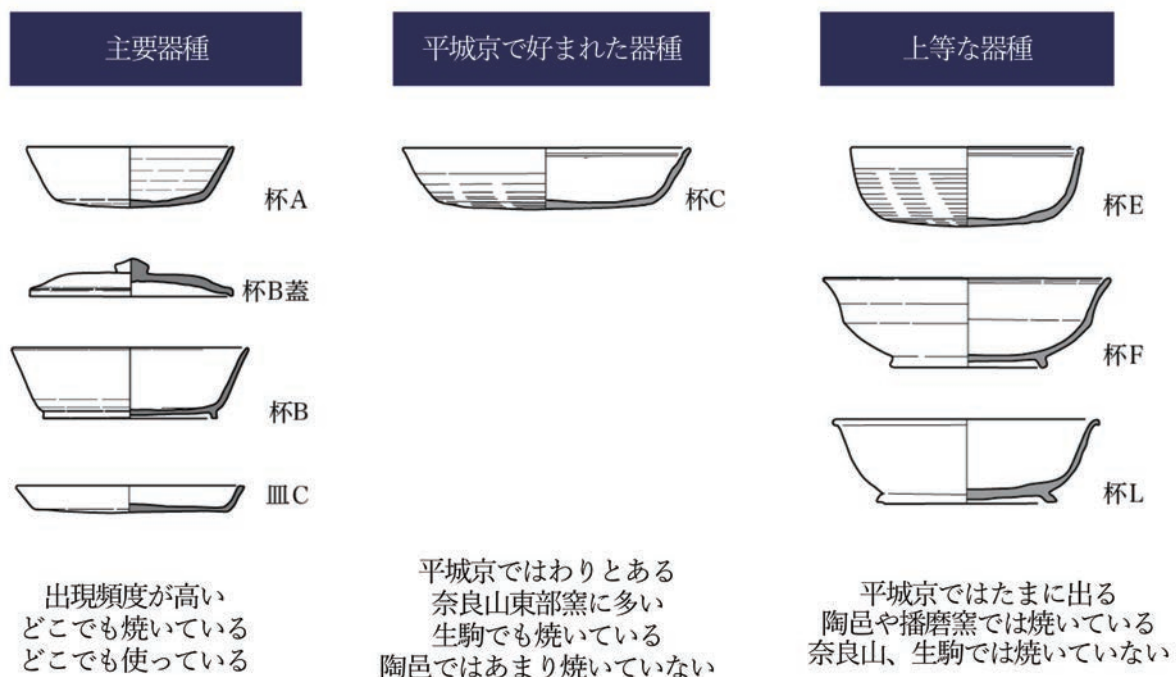


### 3. 奈良山の須恵器の特徴

奈良山丘陵での須恵器生産は、7世紀には奈良市歌姫地域西より(歌姫西窯)で小規模な須恵器生産が確認されている程度で、本格的な須恵器生産は平城京への遷都がおこなわれた前後と見てよからう。最初に生産がおこなわれた窯は、おそらく、岡田国神社の裏山あたりと推定される大谷窯(高味1985)である(第7図2)。この採集資料は京都大学考古学研究会に当時所属していた地元出身の高味寿光さんによって採集され、同会の雑誌「トレンチ」に掲載されたものである。この資料については、今年の6月に高味さんより木津川市に寄贈のお申し出があり、現在、奈文研において整理、図化、分析などをおこなっているところである。このほか、第7図11~16の旧加茂町域に複数の須恵器の窯跡が確認されている。ただし、これら窯跡については、発掘調査はおこなわれておらず、採集された資料などから窯の存在を推定している。ちなみに、旧加茂町で須恵器窯として発掘調査が行われた事例は、西柵窯(第7図17)のみである(加茂町教育委員会1981)。とはいえ、採集資料からある程度の推定は可能である。

これらの窯跡の須恵器をよく観察すると、和泉陶邑窯の製品と区別が難しいほど熟練した製作工人によって作られたと推定できる。須恵器窯は古墳時代にはすでに各地方に技術移転がおこなわれ、生産されていたとみられるが、奈良山地域の須恵器生産は、平城京造営に伴って陶邑窯から工人が移動するかたちで生産がはじまったと考えている。

和泉陶邑窯など他窯とまったく同じ製品を作っているか?という点、そうとも言い切れない点は興味深い。というのも、奈良山では生産が多いが、陶邑などではあまり作っていない器種や、奈良山では作っていない上等な器種があることがわかってきた。例えば、杯Cという土師器杯Aを模

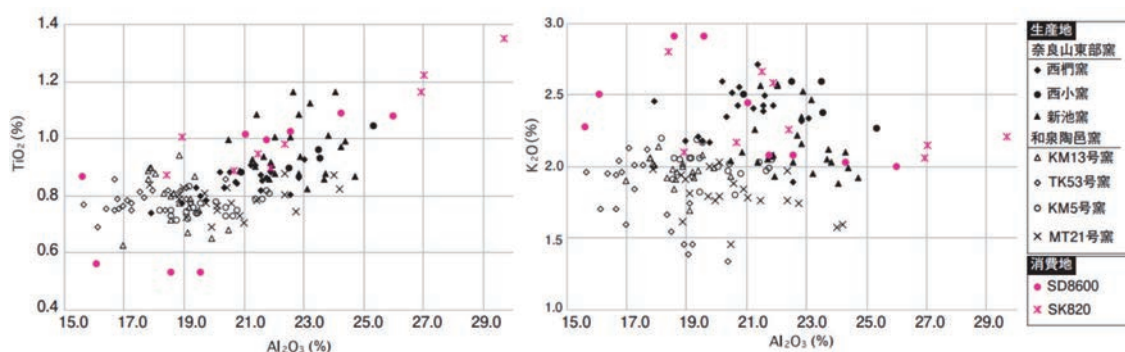


第8図 器種による傾向

倣したような器形の杯は、奈良山ではたくさん作っているが、陶邑ではあまり焼いていないし、金属器を倣したと思しき杯E、杯F、杯Lなどは陶邑窯で量産されているものの、奈良山ではほとんど焼いていない。つまり、奈良山では雑器として好まれた杯Cなどを焼いており、逆に陶邑窯では金属器倣など上等の器種を製作する傾向にあったとみることができる。つまり、商品価値の高い上等な器種は、輸送コストを考えても陶邑から運ぶ値打ちがあったが、雑器の類はほとんどが奈良山など平城京近郊で生産されたのだらうと考えている(神野2022)。一方、甕などの貯蔵具については、酒造りなどに使う大型の甕Aは、それ専用の大型の窯を必要とすることから、なかなか奈良山丘陵で焼成することが、技術的には難しかった可能性が高い。逆に陶邑窯では大型の甕を中心に焼成するKM51窯もみつかっており(大阪府教育委員会1986)、奈良時代には陶邑窯はより商品価値の高い製品を生産する窯が多くなっていたのであろう。裏返せば、平城京近郊での日常品の須恵器生産が一定量確保できていたことを示唆する。

#### 4. 奈良山の須恵器生産の開窯時期と衰退

奈良山丘陵での須恵器生産は、7世紀には奈良市歌姫地域西より(歌姫西窯)で小規模な須恵器生産が確認されている程度(奈良文化財研究所2014)で、本格的な須恵器生産が始まるのは奈良時代はじめと考えている。前述のように、奈良山産須恵器は詳細な肉眼観察だけでは、陶邑窯との区別が難しい。奈良山丘陵は陶邑窯同様、和泉層群(大阪層群)と呼ばれる白亜紀の海底に溜まった粘土が隆起して形成されているため、基本的には同じ粘土層を使っているということになるが、加茂地域の須恵器については、微量元素の偏りからある程度、陶邑窯との峻別が可能である。チタンとカリウムの量が、やや奈良山の窯から出土したものの方(第9図黒塗り)が、陶邑窯から出土したもの(第9図白塗り)よりも多い傾向にあることがわかる。つまり、グラフの上側に分布する傾向にあるのは奈良山、下の方に分布するのは陶邑である。ここに平城宮から出土した奈良時代初頭の須恵器資料(第9図赤塗り)を加えると、むしろ奈良山のものと近似性が高いことがわかる。そのため、奈良時代初頭の須恵器は、すでに一定量が奈良山の窯で生産されていたのではないかと推定しているわけである。



第9図 蛍光X線分析による微量元素の分布(神野・降幡2020)

それでは、いつ頃まで奈良山での須恵器生産がおこなわれていたのだろうか。奈良山で採集された須恵器の中身を外観すると、奈良時代前半に偏る可能性が高いと考えている。奈良時代後半には、須恵器生産の中心が生駒山に移ることがわかっている(第1図)。生駒では金比羅窯で「宮」と窺描きされた須恵器が発掘調査でみつかっており(生駒市教育委員会2009)、奈良時代中頃には開窯している可能性が高い。

なぜ、奈良山丘陵の須恵器づくりは、比較的短期間で終わってしまうのだろうか。この点については、地質的な制約があるのではないかと推定している。つまり、須恵器を焼くためには、豊富に粘土が取れることが望ましいが、加茂地域の踏査で崖面で粘土が剥き出しになっているような場所を見てまわると、和泉層群の粘土層が比較的薄い場所がいくつか確認できた。つまり、平城京造営時の綿密な計画は、須恵器造りに関しては、計画通りに行かなかった可能性が高いのではなかろうか。

## 5. おわりに

平城宮の人々の暮らしを支えた奈良山丘陵は、生産の場であり、物資運搬の要衝でもあり、宮都を守る盾でもあった。とくに加茂盆地は、東海道への玄関口として重要な役割を果たしていたと推定されており(第1図)、古代史の歴史舞台の立役者であるともいえる。大阪に近い生駒や学研都市など開発が進められてきた奈良山の西側は、発掘調査が多い代わりに、壊されてしまった遺跡も多い。奈良山の東側の地域は、まだまだ遺跡が土の中に眠る秘められた歴史の町とも言える。今回の発表が地元住民の方々が地域の歴史を理解する一助となり、今後貴重な埋蔵文化財を地域の財産として保存、活用にご尽力いただけるきっかけとなれば幸いである。

## 参考文献

- 生駒市教育委員会 2009『生駒古窯跡群資料集成 1』(生駒市文化財調査報告書 28)
- 植野浩三「200 大和における須恵器窯跡」『総合研究所所報』8 奈良大学総合研究所
- 大阪府教育委員会 1986『陶邑 I』(大阪府文化財調査報告書第 28 輯)
- 加茂町教育委員会 1981『西柵遺跡』(加茂町文化財調査報告第 2 集)
- 高味寿光 1985「木津町大谷窯の採集須恵器」『トレンチ』第 37 号 京都大学考古学研究会
- 重見 泰 2002「律令時代の須恵器生産—生駒古窯跡群からみた宮都の発達と須恵器生産の展開」『古代学研究』156・157
- 神野 恵・降幡順子 2020「平城京出土須恵器の胎土分析」『奈文研紀要 2020』奈良文化財研究所
- 神野 恵 2022「平城京近郊の須恵器生産」『奈文研論叢 2』奈良文化財研究所
- 巽 淳一郎 1995「奈良時代の甌・甌・缶・由加—大型貯蔵用須恵器の器名考証—」『文化財論叢 II 奈良国立文化財研究所創立 40 周年記念論文集』同朋舎出版
- 奈良文化財研究所 2014『歌姫西須恵器窯の調査』(奈良文化財研究所学報第 93 冊)







第 153 回埋蔵文化財セミナー資料

発行日 令和 5 年 12 月 9 日（土）

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナーなどの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075) 933-3877 (代表) Fax (075) 922-1189

